

専門家の診断を受けましょう！

収蔵品のコンディションに異変があったら、専門の修復技術者の診断を受けましょう。
積極的に修復技術者とコミュニケーションを図って、ともに修復の方針を考えていくことが大切です。

- 例えば Q. 修復の目的（展示活用の予定など）は？
Q. その作家・作品の価値（表現の特徴など）は？

症状、修復の目的、重視すべき作品の価値などを考慮して、修復のレベルを選択します。

- 応急修復：差し当たりの展示活用ができるように処置します。
- 部分修復：解体の必要がない局所的な症状だけに処置します。
- 解体修復：表装やパネル装から本紙を取り外して十分な処置をします。

「コンディションチェックシート」ならびに「修理設計書」作成のすすめ

- 修復には、まず修復技術者による診断が必要です。劣化や損傷の状態や原因について正しく把握しましょう。診断を元に作成された「コンディションチェックシート」は、館内で共有し、修復の時に備えて保管しましょう。
- 修復をする場合には、修復技術者とのコミュニケーションが必要です。修復の目的（展示活用の予定など）や、その作家・作品の価値（表現の特徴など）などを伝えて、修復技術者とともに修復の方針を考え、最も適切なレベル（応急・部分・解体）の修復を選択しましょう。

「修理設計書」作成の依頼

「修理設計書」には、修復の方針に従って、具体的な処置と手順が示されます。

なお、修復が具体的に計画されている場合には、「修理設計書」に併せて「見積書」の作成を依頼します。

「修理設計書」作成のメリット

「修理設計書」と「見積書」は臨時的な修復費を獲得する際の説明資料になります。

- ・助成金の申請に活用することができます。
- ・入札を行う際に提示する「仕様書」の作成に活用することができます。
- ・修復に関わることが少ない学芸員の方が知識を得る機会にもなります。

なお、上記の書類作成には、出張費のほか、知見の供出や書類作成に関する費用が発生しますので、あらかじめご相談ください。

近現代日本画 保存修復ガイドライン

作品の価値を損ねない修復・可逆性のある修復

伝統的な日本絵画とは異なる新たな画材が使われ、画家の創意によって多種多様な技法が使われている近現代日本画を保存修復していくためには、伝統的な日本絵画とは異なる個別の方法を講じていかななくてはなりません。その際には、作品の価値を損ねる不適切な処置を避け、数十年後にも副作用のない処置、後世の修復が可能になる処置を選択していく必要があります。

このガイドラインは、美術館に収蔵された公共財としての近現代日本画を適切に保存修復していくための手引きとして作成しました。

問い合わせ先



〒604-8187
京都市中京区東洞院通御池下る笹屋町445
日宝丸ビル2F 1・2号
Tel: 075-211-2609 Fax: 075-211-2631
E-Mail: info@kokuhoshuri.or.jp



<https://www.kokuhoshuri.or.jp/>

本冊子は連盟HPからも
ご覧いただけます。

おもな症状と処置の例

シミ

余白や胡粉が使われた部分に生じたシミが目立つことで、作品の鑑賞を阻害することがあります。

通常は水によるクリーニングによって、作品に負担がかからない範囲の緩和を行います。過酸化水素水などの漂白剤を使用すると、絹や紙の劣化や副作用を引きおこす可能性があります。近年、酵素を用いたクリーニング方法が試行されています。（※1 コラムを参照）

剥離

画家の技法や保存環境が原因で顔料層に亀裂や剥離が生じ、剥落によって画面が損なわれることがあります。

基本的に、剥離している顔料層の下に適切な濃度の膠水を差し込んで固着させます。なお、顔料層の上から膠水を含浸させる場合、顔料層の表面のみに膠分がとどまると剥離を助長します。合成樹脂を使用すると副作用が生じたり、後世の修復ができなくなったりすることがあります。

剥落

剥落した部分に色や図像を加筆することは、作品の価値を毀損する行為です。

これ以上の剥落を防ぐための現状維持が修復の基本です。近年、近現代日本画に対しては、補彩補紙という方法が試行されています。（※2 コラムを参照）

カビ

カビは画面を汚損する可能性があります。また、収蔵庫や展示室で他の作品に転移する恐れがあります。

エタノール80%濃度での除去が効果的ですが、色材に及ぼす影響も考慮しなければなりません。カビの除去と同時に、発生原因の究明と解消が急務です。併せて、保存環境の点検を行いましょう。

掛軸の折れ

基本的に裏打ち紙の新調など、伝統的な日本絵画の修理方法で対処できます。（※3 太巻添軸を参照）

屏風・額装の角しかみ

基本的に下地骨の新調や裏打ち紙の新調など、伝統的な日本絵画の修理方法で対処できます。



▲ 絹本の余白に生じたシミ



▲ 顔料層の剥離



▲ 顔料層の剥落による欠失



▲ カビ痕

保存のための処置の例

太巻添軸（※3）

掛軸の折れは、おもに巻くことによって生じます。

軸棒に太巻添軸を装着することによって、軸径を大きくして軸への負担を軽減します。ただし、軸径に合わせた軸箱の新調が必要になるので、費用の他に軸箱への墨書の保存を考える必要があります。中性紙製の紙管や中性紙箱を使用する方法もあります。

裏打ちと下張り(袋掛け)

解体修復の際には、裏打ち紙や下地骨あるいはパネルの交換を行います。

裏打ちでは、紙の品質に加えて、使用する糊が重要です。剥がせない糊や劣化を促進する糊の使用は避けなければなりません。シナベニヤパネルを使用する場合でも、ベニヤの影響を緩和し、裏打ちを補強する袋掛けをすることが必要です。

コラム 「汚れ」？「古色」？

作品完成後に付着した「汚れ」と、作品の材質そのものが経年変化した「古色」は区別して観察しましょう。「汚れ」には、虫糞、カビ、塵埃によるものや、下地材に起因する錆やヤニなどがあり、放置すると本紙の劣化や損傷を促進する恐れがあります。「汚れ」は、修復において可能な限り取り除くことが望まれます。一方、「古色」は自然現象のため、修復によって描かれた当初に戻すことはできません。作品が描かれた紙や絹は長い時間を経て褐色を帯びることがあります。顔料や染料、金属材料などもそれぞれに経年変化が生じることがあります。修復とは、「汚れ」を取り除いて鑑賞性を回復するという見た目の問題だけでなく、付着した劣化因子を取り除いて保存性を高めることでもあるのです。

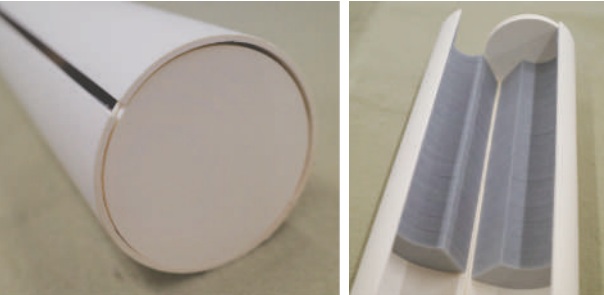
コラム 新しい技術の開拓

● 酵素を用いたクリーニング（※1）

シミの除去には、薬剤を使用しないことが望ましいですが、水だけのクリーニングには限界があります。そこで、シミを形成する特定物質だけを溶解する酵素を用いたクリーニング法が模索されています。

● 補彩補紙（※2）

文化財修理の原則では、顔料が剥落していても本紙が残存している箇所への補紙や補彩は行いません。しかし、鑑賞性が重視される近現代日本画では、顔料が剥落した本紙の上に極薄の和紙を貼って周囲の色彩に合わせて補彩する方法が試行されています。しかし、いまだ事例数が少ないため、普及させていくための情報共有や検証が必要な段階にあります。



▲ 中性紙製の太巻添軸（左：閉じた様子 右：内部の構造）

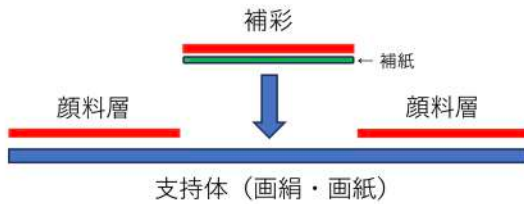
改装

軸装から額装、屏風装から額装

収蔵やハンドリングの観点から改装を検討する際には、表現の意図や時代性などを充分に考慮して作品の価値が損なわれないようにする必要があります。



▲ 補彩補紙の施工例



▲ 補彩補紙の模式図